**説教20230430使徒言行録4：32-37ヨハネ10：11-16「思いを共有し」**

**別府不老町教会でのこの礼拝はyoutubeの動画に残されていて、後から見られるようになっています。そしてその動画の入り口で、教会に集う方々が、将に羊たちの一つの群れの様に仲睦まじい姿で描かれていますが、この絵は、前の牧師の御家族が描かれたもので、今なお動画の入り口で見られるようになっています。イエス様によって人々がこのように一つに集められて、親しく交わり、愛に満ちた人生を送っているその姿は、聖書が語ることの一つの実現であります。そして世界中の人たちがイエス様によって、全く一つの群れとされるというその完成の時は、最後の最後に訪れるのであり、私たちはその時が来るのを今、待ち望んでいるのです。**

**今日の聖書箇所のテーマは、イエス様によって、私たち、そして天も地も一つにされて一つの群れに完成されていくということであります。その一つにされていくということは、私たちにとって計り知れない喜びであります。残念ながら、今のこの世の中はそれとは逆の、分断の方向へと向かっている様であり、悩ましい出来事が絶えず起こり、心が折られていくようです。しかし、そう言う状況だからこそ、私たちは、毎朝、よみがえられるイエス様と新たに出会い、心を新たにした新しい命に生きるようにされなければなりません。**

**イエス様は、羊と羊飼いのあいだに見られる、良い関係を、私たちの間にももたらして下さいます。そして神のひとりごであるイエス様ご自身も、父なる神との関係を、羊と羊飼いと言う関係に喩えて語られました。この羊と羊飼いとの愛に満ちた関係は、聖書のいたるところで記されてますので、皆さんも毎日あじわっておられることと思います。**

**詩編23編詩編/ 023編 001節**

**【賛歌。ダビデの詩。】主は（わたしの）羊飼い、わたしには何も欠けることがない。**

**詩編/ 065編 014節**

**牧場は羊の群れに装われ／谷は麦に覆われています。ものみな歌い、喜びの叫びをあげています。**

**この様に神と人、そして人間同士の親密な関係が、羊飼いと羊という、人間と動物の間の関係に喩えられているということも、単なる人生訓に終わらない聖書の奥の深さでありましょう。**

**動物と人間の関係と言うのは、その関わり方が人によって素直に表現されるようです。例えば、ここ別府には外で暮らす野良猫が沢山います。その姿をよく見かけますが、猫と人間という関係を語るならば、ある人は外でひもじい思いをして暮らす猫を憐れに思って、エサをやり、ある人は家の中で飼うほどに猫かわいがり致します。又ある人は、人に依存しないで自活しているネコの姿を見て、そのたくましい姿に励まされながら、猫たちを見守っているという人もおられます。**

**今日のヨハネの聖書箇所には、羊と言う動物に対して人が関わっていく二通りの仕方が描かれています。それは良い羊飼いとしてか、それとも雇い人としてかの二通りであります。**

**もちろんこの羊飼いとか羊とかいいますのは、譬えの表現でありまして、それらが何をたとえているのかには複数の意味があります。羊飼いと言うのは、父なる神様であり、又、イエス様であり、又、牧師であり、広い意味では、信者一人ひとりのことであります。**

**そして、羊と言うのは信者一人ひとりのことであり、又牧師のことであり、イエス様のことでもあります。**

**このように言いますと、何か漠然としてしまいますが、父なる神は、この様に全てのものごとを最終的に羊飼いと羊という愛に満ちた関係にしようとしてこのように喩えられているのです。**

**人の立場と言うのは、一人の人生の内にも変化をしていきます。この世に生まれ落ちた時は、誰しも羊として生まれ、そうして地上で日々を送るうちに、羊であることを捨て、人の世話をする羊飼いであることを得ていくように変えられます。そしてこの様に、人を新しくし、羊から羊飼いとして下さるのも、又羊飼いであるイエス様であります。**

**「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。」イエス様は、私たちにこの様に言われました。私はあなた方一人ひとりの名前を知っており、いつも心にかけ、その名前を呼んで、呼び集め、従順に従う者を、永遠に導き、最後に完成された祝福の牧場へと招き入れられます。その牧場では、全てが、羊飼いと羊という愛に満ちた関係で満たされています。**

**この様に最後まで導いて下さるまことの羊飼いは、将にイエス様お一人であります。聖書にもそのように書いてあります。**

**「こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。」と**

**しかしイエス様は、人が人の世話をするようにと、次の様に人に向かって言われています。ヨハネによる福音書/ 21章 15節以下**

**食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。**

**二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。**

**三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。**

**少し長い引用になりましたが、この様にイエス様は何度も何度も、口を酸っぱくして、ペトロに対して、羊たちの羊飼いとなって、神の愛を行うようにと勧めたのであります。これは何も、イエス様がペトロだけに勧めたわけではありません。ペトロは今はこの地上にはいないわけですから、神の国である牧場が完成をみる為に、イエス様は全ての人に対して、それぞれの時に、それぞれの立場で、羊飼いの役割を果たしていくことを、望んでおられるのだと思います。**

**この様に、羊飼いと羊との愛に満ちた関係は、世代を超えて人々の間で受け継がれていくものであります。且つ、先ほども申し上げましたように、一人の人生の歩みにおいても、日々新しくされ、獲得されていく関係なのであります。**

**そしてこの様な長い歩みを経て、父なる神は、この世の中が、羊飼いと羊との愛に満ちた関係に満ち溢れるようになり、そうしてこの世と神の国との通路が全ての人に開かれて、神の国の牧場が完成をみるということを神は御計画されているのです。**

**その神の御計画は、人間にははかり知ることが出来ない仕方で、実現されていくのでしょう。それは人間の思いやはかりごとをはるかに超えた、素晴らしい御計画であることは間違いないですが、私たちは、今日の聖書箇所での羊飼いと羊のたとえなどから、その御計画の一端に触れることがゆるされています。**

**さて日々心が折られるような、今日の過酷な世の中にあって、今日の聖書箇所で身につまされるのは、狼が登場する場面であります。**

**――狼は羊を奪い、また追い散らす。――**

**ここで登場する狼と言うのも、又、何者かをたとえているのですが、それはどういった存在なのでしょうか。それは、記されてあるとおり、羊をイエス様から引き離し、羊の群れを分断していこうとする人たちであります。**

**羊をイエス様から引き離し、羊の群れを分断していこうとする人たち、こういった人たちは沢山います。父なる神は、この世に在って、こういった人たちを敢えていたるところに配置したと言ってもいいでしょう。**

**私たちは、そんなことをする人は追い出してしまえとも言えないのではないでしょうか。なぜならば、そのようなことをする人、と言うのは全く他人ごとではなくで、多かれ少なかれ自分自身のことでもあるからです。**

**では、そんな罪深い私たちはどうすればよいのでしょうか。そのこともちゃんと今日の聖書箇所に書いてあります。15節より**

**わたしは羊のために命を捨てる。と書いてあります。**

**羊飼いであるわたしは羊のために命を捨てる。これはどういうことを言っているのでしょうか。それは、羊飼いである私が、羊との関係を切ろうとしないで、出来る限り最後まで保っていくと行くことです。言うまでもなく、この世の死と言うのは、命の終わりではなくて、イエス様から新しい命を受けることであります。この様に羊の世話をしながら、イエス様の御心の通りに、この世で命を捨てることになった者は、再び新しい命に生きることが約束されているのです。それは一人の人が、この世に羊として生まれ落ち、そうして地上で日々を送るうちに、羊であることを捨て、人の世話をする羊飼いであることを得ていくように変えられるという有様にも似ています。**

**羊のために命を捨てる、ということが私たちに対するイエス様のお勧めでありますが、反対にイエス様が悲しまれる生き方と言うのも聖書に明記されています。**

 **13節**

**彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。**

**羊飼いの仕事を任されながら、それを雇い人の様に行う者を、イエス様は悲しまれます。雇い人は自分の羊を持たず、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げてしまいます。逃げるのなら、なぜ羊と一緒に逃げないのでしょうか。それは、彼が平生、羊のことを気にかけていなかったからであります。**

**彼は他のことに気が散っていました。彼は平生、イエス様と共に歩み、御言葉に慰められ御言葉を味わうということがなかったのでしょう。イエス様からの「わたしの羊の世話をしなさい、私の羊を飼いなさい」という御言葉を受け止めることもなかったのでしょう。**

**彼は、自分の手柄や業績や名誉を追い求める者であったかも知れません。**

**今日の聖書箇所で、私たちは、主イエスの御心によって命を捨てるということが、恵み深い一つの出来事であることを悟らされます。そのように私たちは日々古い命を捨てさせていただいて、新しいキリストの命に生きる者へとよみがえって参りたいと願います。**

**祈り**

**あなたは、私の羊飼い、私は乏しいことがない。**

**あなたはこの世の死をも乗り越え、私を見捨てることなく最後までともにいて下さる慈しみ深いお方です。その計り知れない慈しみに感謝し、あなたを褒めたたえます。**

**また、あなたは私たちに恵みを下し、私たちが羊飼いとなる事を得させて下さいました。永遠の命に至るその喜びに満ちた業を、最後まで見守り行わせて下さい。**

**あなたが最後に恵んで下さる完成した牧場では、蛇も害することも滅ぼすこともないといわれ、そこには全き平和が実現されています。私たちには計り知れないその慈しみを、今ここにも及ぼして下さい。**

**――狼は羊を奪い、また追い散らす。――**

**今ここに迫って来る試練から私たちをお守りください。暗闇のさなかにあなたの光を輝かせ、私たちが逃げるべき道を確かに指し示して下さいますように。**

**父と聖霊と共に**